

「遺跡は文化遺産だ」

大島直行*

皆様こんにちは。北海道伊達市からまいりました大島です。秋田でお話をさせていただくのはこれが2度目です。3年ほど前に生涯学習の関係の講演会がありまして、その時には、私は縄文の考古学が専門ですので縄文文化のお話をさせていただきました。今日もそうした専門的な話も少し取り入れてお話をさせていただくつもりですが、話の主眼はどちらかと言いますと「まちづくり」についてです。テーマを「遺跡は文化遺産だ」とさせていただきましたが、この話の中で最も大切なキーワードは、実は文化です。

昨日の発掘調査報告会におきましても、埋蔵文化財という言葉がたくさん使われていました。ここにも文化という言葉が入っています。文化財という言い方もありますが、遺跡や遺物だけでなく古い民具とか伝統的な芸能、そういったものも文化財です。そして国には文化財保護法という法律があって、そうした文化財が護られています。

文化財という言葉を知らない人はいません。多くの方が“文化財は大切だ”ということも何となく分かっています。法律があることも理解できます。文化財保護法という法律があって、それに基づいて色々な文化財を護っていきましょうということです。しかしよく考えてみると、私達は“なぜ、文化財は大切なんですか？”という問いに果たしてきちっと答えられるでしょうか。

それは日本の古い歴史を唯一証明するものであるからとか、さまざまな答え方がされますが、多くの方は法律があるから文化財は大切なんだと、ある意味では言い分けをしているようなところがないでしょうか。特に一般の市民の皆さん方よりも、文化財に関わって仕事している学芸員であったり、それから遺跡の調査員であったり、そういった専門職の私達が実はそうした言い分けをしているような気がします。

発掘をし、それを整理して研究して報告・公開する。そうした仕事の中で、市民の方々から、“一体、何でそういうことをやっているんですか？”と言われたときに、“これは文化財保護法という国の法律があるからですよ”というふうに言うてはいないでしょうか。

人を殺してはいけないということは誰もが理解しています。“なぜ、人を殺してはいけないんですか？”という問いに、“それは犯罪だからだ”と、“ちゃんと法律があって罰せられるからだ”と、多くの人は答えるのだと思います。でもここにも、文化財と同じような勘違いがあると思いませんか。本当は違います。人間の尊厳、これがあるから私達は人を殺してはいけないわけです。

人間は存在そのものが大切なわけです。生きているということが人間の本質なんです。だからこそ人間は生きるということが必要なんだと、殺してはいけない、死んではいけないんだという説明がなされるべきです。決して法律があるから殺してはいけないということではないのです。そして、そういったものを越えて人を殺したりする者がいるから、そこには、一定の罰を与えようということでは

*北海道伊達市噴火湾文化研究所所長

律が生まれたはずです。

文化財保護法も同じだと思います。私達はもっとなぜ文化財が私達にとって必要なのか、なぜ法律まで作って護らなければいけないかということを考えてみるべきではないかと思います。今日は、文化財を護るためにもっと文化ということをしっかり考えようというお話させていただくつもりです。



私は、文化財の仕事に長く携わってきて、あることに気付きました。それは、文化財というのは大きく考えたときに文化の一つだということです。そうしたことを私に気付かせたのは、実はある女性でした。長野県小布施町の造り酒屋のセーラー・マリ・カミングスさんです。

セーラーさんには、私の街に一度来てもらい講演をしていただきました。その後も札幌と東京で講演を聴く機会がありました。彼女からは文化について非常に多くの啓発を受けました。

特に、“文化が大切だ”ということはどうやって人に伝えようかというときに、彼女は大変に頼りになる存在だと思いました。皆さんの中にはご存じの方がいるかもしれません。長野県の小布施町という人口一万人ちょっとの小さな町ですが、彼女はそこの観光客をあつという間に、おそらく二百倍ほどに増やしたのではないのでしょうか。

彼女はアメリカ人です。長野オリンピックの時に通訳ボランティアとして長野を訪れて、すっかり小布施町というまちの魅力に取り憑かれたのだそうです。ここで仕事がしたいということで、ある酒屋に務めたのです。それは江戸時代から続く長い伝統をもった造り酒屋です。ところが、そこに入ってみると、なんと明日にもつぶれそうな酒屋だったんですね。せっかくの古い伝統がありながら、考え方が逆で、“そういった古いものがあるからうちの店は駄目になったんだ”と。ですから、それまでの樽仕込みを止め、効率のいいステンレスの樽に代えて酒造りをやっていると。それから伝統的なハッピー姿はやめて、従業員が働きやすいようにジャージですとかジャンパースタイルに変えてしまったそうです。

彼女は、せっかく四百年からの伝統がありながら、そのことをどうして大事にしないのだという思いから、日本人がやらないのなら私がやってやろうという意欲で、この会社の再建に取り組んだのだそうです。そして数年後に彼女は取締役になりました。彼女がすごいのはその酒屋を再生しただけではなくて、小布施の町そのものを変えてしまったということです。町民を一人二人と引き込んで、小布施の町にはこんなに素晴らしい文化があるじゃないかということを広めていったんですね。まさに文化でまちおこしを行なったわけです。

私は彼女に多くのものを学びました。今も学んでいます。書いたものもありますし、時々新聞にも取り上げられたりしています。テレビに出てくる時の彼女の発言を聞いた時に、ものすごいパワーを感じました。“文化にはやはり可能性がある”ということを経験から学びました。そういうことは大事で、実はそういう材料は私達の周りにたくさんあります。

私達は、よく文化財を生かしたまちづくりについて考えますが、これは難しいです。何故難しいかと言いますと、私達はまちづくりというとすぐに観光資源としての活用を考えてしまいます。だから難しいのです。そもそも文化財や文化というのはそれ自体観光、つまり経済効果を生むように

はできていないのです。なぜ文化財を法律まで作って護るかといいますと、そのまちの発展や人が生きる上での拠り所として大事だからです。そうして、多くの市民がそのことに気付き皆で護るための活動を行なう、それがまちづくりであり、そういうことをやっていくと他のまちの人が魅力的に感じようになりそれを見に来るようになる。ここで初めて文化財が観光資源化されるわけです。

史跡や重要文化財などの歴史資料や、音楽や美術、文学などの芸術、私達はどこのまちにしようと、そうした文化、言うなればそのまちの本質とも言えるそうした文化をきちっと理解しながら、それをまちづくりの原点に据えていかなければ、ちゃんとしたまちづくりなんかできるわけがないんです。何かちょっと突飛な例ですが、もし現実にあったらごめんなさい。例えばまちづくりのために、大きな観音様を建ててしまったり、大仏様を建ててしまったりということがありますよね。北海道には万里の長城やピサの斜塔のコピーを造ったまちがありました。

万里の長城を造るのに、旧石器時代の遺跡が邪魔になってそれを壊して（発掘はしましたが）しまいました。それは本末転倒です。せっかく自分のまちに先人が培った文化があるのにそれを蔑ろにして何か突飛なものをもってきて、“それが文化だ、文化によるまちづくりなんだ”と言っていますが、そんなことはありません。どのまちにも必ず文化があります。そのまちを培ってきた文化があるわけです。それを私達が文化財、埋蔵文化財と呼んでいるのです。

先ほどから言っているように、埋蔵文化財とか、文化財という名前をつけてしまうと、文化という意識がなくなるんです。このことも問題です。本当に大切なのは「文化」という捉え方なのです。

私達が、文化が大切だというときにどうしても文化というとなんか「物」を作ってそれを効率よく使うという図式を考えていないでしょうか。早い話が、遺跡なんかを文化だと称してもなかなか理解されないというのは、それは「物を作り出し、それを役立てる」という図式の中に入ってこないからです。ですからそんな役に立たない文化財などという古いものに拘るのは、“単なる懐古趣味だろう”と、“好きな奴がやればいいんじゃないの”と。そんなものに行政がお金を出す必要がないと思っている人はたくさんいます。

でもそれは、文化に対する考え方がきちっとできていないからです。このことを蔑ろにして、私達がこれからいくら声を大きくして、“文化は大切だ”、“文化行政は必要なんだ”と言っても理解はされません。ましてや文化財というのは理解をされないものの筆頭ですから。そんなことから、まず私達は「文化が大切だ」ということをしっかりと確認しておく必要があります。文化行政に関わっているプロの皆さん方には恐縮ですが、そもそも「文化」ということから話をさせていただきます。



文化というと、一般的に私達が考えるのは「もの」を作り出すことです。言い換えれば「物質文化」というやつです。ものを作り出してそれを使う。しかも効率的に使っていくというのが、文化の発展につながるんだというふうに考えます。では、どうでしょう。人間がこうした物質文化を持ったのはいつからかということを考えてみると、何かひとつ見えてくるものがあります。もしかすると私達の文化に対する考え方は違うのではないかということに気付くはずですよ。

私たち人間は、生物学上は「ヒト」です。カタカナで書きます。生物学上の種名というのはみな、

カタカナで書きます。私たちは、霊長類といういわゆる猿の仲間に入っているわけです。霊長類の中でも、生物学的には「ヒト科」というところに位置付けられています。このヒト科の中にいくつかの「属」があります。私達は「ホモ属」というところに属しています。「ホモ」というのは、まさにラテン語で「ヒト」を意味します。ですから和名はカタカナで書く「ヒト」です。

このヒト科に属しているグループには、他にアウストラロピテクス属があります。また意外かもしれませんが、チンパンジー属とゴリラ属もヒト科の仲間です。チンパンジーやゴリラというのは、遠いようで近いのです。特にチンパンジーは、私達が四足動物から直立二足歩行で歩くことのできる「人類」になる時に、このチンパンジーからアウストラロピテクス属が生まれ、それがホモ属に進化したと言われています。人類学的には、二足歩行のできるアウストラロピテクス属とヒト属を「人類」と呼び、それ以外の四足歩行のチンパンジー属とゴリラ属は「類人猿」と呼んでいます。

さて、この人類には4種類の仲間がいるのです。まずアウストラロピテクス、いわゆる「猿人」と訳されます。チンパンジーから進化して、最初に生まれた人類がこのアウストラロピテクスという仲間です。そして猿人の仲間の中で1番最後に出現したのがホモ・ハビリスです。

次に、これも聞いたことがあると思いますが、原人と呼ばれるグループで、あの北京原人などがそうです。考古学に関連する話題としては、日本にも原人がいたと。北京原人は常識的に1番古くても60万年くらい前ですが、日本にはその原人の仲間でもっと古い70万年前の原人がいたという話がまことしやかに一人歩きしたんですが、これはある研究者の捏造だったわけです。日本には猿人も原人もいなかったという話です。日本列島に人類が登場するのはこの後です。そして、私達ホモ属の中で私達に一番近いのは、ホモ・サピエンスというグループです。

ホモ・サピエンスには実は「旧人」と「新人」という2つの種類がいます。私達はこのホモ・サピエンスの中の新人なのです。旧人とは何かというと、私達がよくネアンデルタール人と呼んでいるヨーロッパにいた集団を代表とする人類のことです。つまり私達人類は、猿人、原人、旧人、新人というふうに進化したと言われてます。

さあ、ここからが問題です。先ほどの話の「物質文化」を人類が手に入れたのは何時かいうことです。アウストラロピテクスは実は、今から750万年ほど前にアフリカで生まれたのです。それが進化していろんな猿人が出てきました。ロブスタス、フリカーヌス、アファーレンシスなどいろいろな猿人が出てきましたけれども、全部絶滅していきました。最後に残った猿人がホモ・ハビリスなのです。今から250万年前の話です。

それで物質文化についてですが、実は750万年ほど前に生まれたアウストラロピテクスはすでに物質文化を手に入れているのです。二足歩行した途端に物を作り出し使っていたわけです。それどころか、最近分かってきたのは、チンパンジーやゴリラも実は道具を作り、それらを使うということです。

特にチンパンジーで有名なのは、アリ塚に棒を差し込んでアリを釣って食べるということです。それは、道具を使うだけかと思ったら、最近分かってきたのは、ちゃんとそのアリ塚の穴に合うだけの棒を探してきて、曲がった部分はまっすぐに直して、それでスッと穴に差し込んでアリを釣るということです。もう750年ほど前の猿人の段階どころか、類人猿のチンパンジーやゴリラも道具を使っている、ある意味ではもうすでに物質文化を持っていたわけです。その後、物質文化はだんだん発展してきます。脳もどんどん大きくなって、ハビリス、エレクトス、そしてサピエンスになった時に、今

の私達の脳の大きさと同じになるわけです。猿人、原人、旧人、新人、みんなもちろん物質文化を持っています。

ところで、新人と旧人はどこが違うのかということをちょっと考えてみましょう。それを考えると、“私達には物質文化だけではなく違う文化もあるな”と気付くわけです。そうなんです。私達は、ものを作り出す物質文化だけではなくて、実は「心」を作る文化も持っているということに気付くのです。では、心を作る文化はどこから出てきたのでしょうか。

旧人も新人もホモ・サピエンスと名付けられましたが、この意味は分かりますか。ホモは「ヒト」、サピエンスは「賢い」という意味です。賢いヒトという意味が、ホモ・サピエンスという名前の由来なのです。そして、賢い理由は何かということ、ものを考えるということです。考える力を持ったヒトがホモ・サピエンスなのです。人類学者はこれまで、人類は旧人の段階からそうした精神文化、ものを考える文化を持ったんだと考えてきました。しかし、それに疑問を呈する学者も現れてきました。旧人にはまだまだ精神文化は芽生えてないのではないかということです。それは何で分かったのでしょうか。ここからが大事なことです。

彼ら旧人は、特にヨーロッパのネアンデルタール人においては、さまざまな物質文化を作りました。見事な石器を作っています。ところが、彼らが描いた絵は一枚も無いのです。いまだに見つかりません。“いや、そんなことないだろう”と、“スペインのアルタミラの洞窟には素晴らしい絵があるじゃないか”と、“フランスのラスコーの洞窟、あそこにも素晴らしい絵があるじゃないか、生き生きとした動物の絵を描いているじゃないか”と。しかし、あれを描いたのはネアンデルタール人ではないのです。あれは次の段階の新人になってから描かれた絵なのです。つまり旧人の段階では、彼らは絵を描いていないということです。

このことは非常に大事です。絵というのは、どうして描けるようになると思いますか。今は脳科学が発達してきて色々なことが分かってきました。人間がものを絵に描くということは、脳の中でのものを抽象化しないと描けないわけです。その抽象化の作業というのは、見たものを写し変えるわけですから、何かをイメージしてそのイメージを手で表すわけです。ですから、コップを見た後に、コップが無くてもそのイメージが頭の中に残っていて、それを写し変えることができるわけです。それが絵なわけです。

ところが、脳のネットワークがきちっとそういう構造になっていないとそれができないのだそうです。つまり、原人や旧人、そして猿人の脳も私達の脳と同じように、前頭葉、後頭葉、側頭葉と頭中葉というふうに分かれています。しかしネットワークの仕方が違うんだらうということです。つまり、旧人の段階では、おそらくそうしたネットワークはできていない。だから絵が描けなかったというわけなんです。

要するに、彼らが絵を描かないのは、脳の構造が私達とは違うからだということです。絵が描けるようになったのはあくまでも新人で、今から7万年ほど前にアフリカの旧人が突然変異を起こして、おそらく脳にネットワークのできた、今までと違った人類、「新人」が生まれたんだらうということです。

私たちは、このホモ・サピエンス、賢いヒトというものに「人間」という漢字を使ってきました。ですから原人は漢字の「人間」じゃないのです。あくまでカタカナの「ヒト」なのです。猿人もカタ

カナの「ヒト」なのです。私達が漢字で「人間」と書くのはあくまでこのホモ・サピエンス、つまり新人と旧人だったんだけど、最近の研究で、旧人は漢字の「人間」ではなく、唯一漢字の「人間」なのはこの新人だけなんです。

その新人が出てくるのは進化の歴史の上ではついこの間、おそらく7万年前ぐらい前のことです。それまでの人類はチンパンジーと同じように体は毛で覆われていたんですが、最後の突然変異が起こった時に毛も無くなって裸になってしまった。えらい騒ぎです。この地球上で、哺乳類の中で裸で生きている動物はほとんどいません。水棲生物のクジラとカバくらいのものです。アフリカには例外的にアフリカハダカネズミという毛のないネズミもいますけども。そのくらい裸で生きていくことは大変なことだけれども、突然変異なんだから仕方がないのです。

おそらくこの時同時に言語も手に入れたんじゃないかと言われています。つまり、旧人は音節言語でコミュニケーションがとれなかった、うまく言葉が操れなかったのではないかということです。言語は脳の進化と非常に密接に関係しています。

人類は裸になり、脳に大きな進化を経て、そしてあっという間に全地球上に広がりました。しかし、ネアンデルタールはヨーロッパの中でも全てを制覇していません。シベリアには進出できませんでした。毛があるにも拘わらず暖かいところにしか住めなかったわけです。それなのに人類は毛が無くなってからシベリアだろうが北極だろうが、地球上のありとあらゆる所に行けるようになったのです。

それはさきほど言ったように、脳に進化が起きてものを抽象化できるようになったし、飛躍的にものを考える力が増えたからです。家を発明し洋服を発明し、そして火を使うようになったのも、おそらく7万年前のこの新人からであろうというわけです。家・服・火の3つを手に入れたことによって、裸であってもどんな寒い場所でも生きられるようになったのです。しかし、もっと大事なのは、彼らが絵を描く力、つまり物事を抽象化する力を手に入れたということです。物事を抽象化するのは、何も絵だけではありません。彼らは言葉を持ったわけです。抽象化したものを声に出すことができるようになったわけです。また、それだけではありません。自由に頭の中で考えながら、何かに置き換える能力もです。

例えば、小川のせせらぎがあります。この音を真似することができます。それは音楽です。今度はそれを頭に思い浮かべながら、ひとつの何か美しい考え事を形にすることもできます。それは何でしょうか。詩であり、文学であります。それから岩に石器で傷を付けながら、絵を描くこともできますし、そこに、岩絵の具を塗り付けて、色を付けることもできました。それと同時に今度はふんだんにある木や岩とか、場合によってはさまざまな動物の骨で、何かを形作ることもできるようになりました。それは何でしょうか。彫刻です。家を造るようになったのも、おそらく何かを抽象化する作業があったことだということです。そして、こういったものを総合して私達は「芸術」と呼ぶわけです。

つまり私は何を言いたいのかといいますと、まさに芸術を手に入れたものだけが、実は新人、「人間」であるということです。こうした人類学的な考え方にはまだまだ議論の余地はあります。旧人も言葉を喋ったということで、旧人もやはり人間だという議論もあります。しかし私達人類の進化の過程を考えたときに、やはりものを抽象化する作業ができて初めて賢いヒト、ホモ・サピエンス、新人になったということを考えれば、ここで初めて人間が生まれたんだということなのです。ヒト科のヒトがいつから人間になったのか、それは人類の長い歴史の中ではついこの間のことなのです。

つまり、人類が「人間」の段階に到達したのには、精神文化を手に入れたということが重要な働きをしていたのです。人類になった時に初めて物質文化を手に入れたのですが、文化にはもう一つ、精神文化があり、この地球上で唯一人間だけがその精神文化を手に入れたということです。このことを考えたときに人間の本質が見えてきます。私達は何かしら、ものを作り、ものを使ってさまざまなことをやってきました。でもそれは人間の本質ではないということに気付かなければ駄目です。私達人間にとって本質的なものは、この精神文化、言い換えれば芸術的な心性を育む文化、もっと言い換えれば心を作り出す文化です。

私がことさら文化に対して拘るのは、人間にとって最も本質的なのはこの精神文化を持っていることだということをきちっと押さえてかからなければ、これから先、文化財行政を考える上でも立ち行かなくなると考えるからです。市場主義経済の論理に押し流され、物やお金中心の価値観でしか文化を考えられなくなる危うさを憂えるからです。

これから私が話すことは、縄文祭りをやろうが、ボランティアを組織しようが、全部根っこには「文化はなぜ大切なのか」という理論付けの上に展開しなければならないということです。埋蔵文化財は、法律で護られているくらい大切なものと言っても、一般の方にはその意味が分かりません。本質的なところが分かってないわけです。本質はここにありますよ。人間は精神文化、心の文化がなければ生きていけませんよ、だから大切なんだということをまず伝えなければなりません。私達はややもすると、物だけで生きていこうとするわけですが、先ほどお話ししたように人類の歴史上、物だけで生き残れた人種はないのです。猿人も原人も旧人であるネアンデルタール人もすべて絶滅したのをご存じでしょうか。

ネアンデルタールは、3万年くらい前までヨーロッパで生きていたそうです。新人は7万年前に生まれました。ヨーロッパの新人はいわゆるクロマニヨン人ですが、クロマニヨン人とネアンデルタール人は、ある一時期一緒にいたんです。しかし結婚した形跡はありません。それは、まったく種が違うわけですから。私達は、人類は何となく環境に適応しながら順に段階をおって体や顔付きを変えてきたように思いますけど、そうではないということです。ネアンデルタールも全部絶滅してしまいました。やはり物質文化だけでは生きていけなかったのです。現在、地球上で生きている人類は私たち人間だけです。このまま人間が生きていくためには、霊長類の中で唯一精神文化を持っているのは人間であり、その精神文化にこそ人間の本質があるのだということに気がつき続けることが必要だと思います。

私は最近おもしろいことに気がきました。先ほどから人間の本質の話をしておりますが、人類としてこのことを最初に世に問うたのは、もしかするとアリストテレスではないかと思ったのです。アリストテレスは言うまでもなくギリシャの生んだ高名な哲学者ですが、問題は彼の生きていた時代です。そうなんです、彼は紀元前の384年の生まれですから、それはまさに縄文時代ではないですか。すでにその時代に、人間の本質は精神文化にある、人間の根源は芸術にあるんだと言った人がいたということです。驚くべきことです。彼は、あの有名な著作『詩学』の中で、人間にとって人間性を表現するための最も有効な手段は「詩」だということを書いているのです。

私にとっては、これはちょっとショックでした。縄文時代が原始的で遅れた時代だと思っていた証拠です。普段私は“縄文時代ほど精神文化を大事にした文化はないんですよ”と口では言っていたの

に、感覚的にはどこか縄文文化を蔑んでいたのでしょうか。私達というのは、精神文化というのはあまり重要には思わない、人間にとって一番大切なのは、物の文化、物質文化だといかに考えているかだと思います。こうした反省にたった上で、まずは文化が大切だということを念頭に置きながら、これまで私がやってきた活動についての話に進みたいと思います。



私は、今から12年ほど前に伊達市役所に入りました。教育委員会に配属になり遺跡担当のポストをもらいました。伊達市には北黄金貝塚という国指定の史跡があります。縄文時代の遺跡です。それを整備して公園にし、多くの人に喜んでいただけるような施設にしたいということでした。

職員になって間もなく、私はえらい仕事を引き受けてしまったことに気付きました。私はそれまで17年間大学に務めていましたが、自分のやっていることは先ほども言いましたけども、何か人の役に立つなどと考えたことがないわけです。それが、いきなり、“史跡整備は学者の仕事ではありません、あなたは少なくとも伊達市役所の中で管理職の地位にありますから、きちんと部下とうまくやりながらこの仕事を市民のために役立ててください”と言われました。

“え～、そんなこと私は聞いていません”なんて言えません。もう来てしまったわけですから。さらに大変だと思ったのは、市役所の中でちゃんとしたコンセンサスが得られていなかったということです。当時、伊達市の職員は400人程おりました。その中で職員全員が、国指定の史跡の北黄金貝塚が大事なものだ、少なくとも私が言っているような文化という意味で大切だと思っている人はほとんどいませんでした。せいぜい“法律があるから仕方ない”と、“整備費用は国から出るし、北海道の補助金もあって少ないお金で遺跡公園ができるから、子供達のために造ってやれ”といった程度の理解でした。

もっとショックだったのは、こうした私の仕事に対していかに市民の皆さんの理解がないかということを感じたことでした。極端な話、“そんな仕事するのに課長が必要なのか”とか、“市役所とはそんな楽な所なの”というような話も聞かされました。これは由々しき問題だと、こういう人達をどうやって説得するんだと、二重三重のバリアを張られた思いでした。

実は、バリアはもう一つありました。それは経済界です。彼らが全くそっぽを向いて協力してくれないわけです。せいぜい言われるのは、“それ何、観光資源になるの”。観光資源になるのだったら経済効果を生むから、ちょっとくらい金をかけてもいいかなという発想です。

しかし私は、“遺跡の本質はそんな所がない、遺跡で金は儲からない、結果として金儲けにつながるのはいいけれども遺跡はあくまで私達の文化遺産であり、私達が生きていく上で、市民が生活する上で、文化は絶対無くしてはならないものだ。物だけ作って使っていたら、いつか人類は滅びるんだ”という大きな視点に立っていますから、私と経済界の方々とのギャップは大きいのです。これははっきり言って埋められない溝だなと思いました。市役所の人間の中でのステータスが確立されていない。市民の皆さんとのコンセンサスが得られていない。伊達のまちを動かしているのは経済界ですが、その経済界の人達の支援が無い。あれも無い、これも無い。私はもう大学に戻るしかないかなと思いました。しかし、そんな八方塞がりの時に救世主が現われたのです。

私と同年代の方々、まちの方々と、石材店を営んでいる方とか書店の店主、事務機会社の社長、バラ農園の主人、こういった何人かの方と親しくなった時に少しずつ見えてくるものがありました。史跡公園整備は、国からも北海道からも補助金が出ますし、市も国や道が出すのならとお金は出してくれます。どんな形であれ遺跡公園はできます。しかし、そうした状況の中で、公園が完成したときのことを想像して私はぞっとしました。そんな市民の理解も得られていない、市役所の理解も得られていない、経済界の支援も無い中で、3億5千万ほど投じて造った史跡は何だろう。だれも喜ばない公園ならむしろ造らない方がいいのではないかと。でも流れとしては造る方向にあると。だとしたら何とかしなければと思っていた時でした。

最初に手がけたのはボランティア制度です。遺跡整備にはある程度ルールが敷かれていまして、国の指導メニューがあります。例えばガイダンス施設を建てなさいとか、堅穴住居を復元してくださいとか、それから色々な人が利用するわけですから、例えば女性がハイヒールで来ても歩けるように通路もちゃんとアスファルトで舗装してくださいといった具合にです。さらに防犯のためには街灯もつけてくださいと。そして子供達がたくさん来たら水飲み場も必要でしょうと。休む所も必要ですよ、東屋も造りましょうと、メニューがたくさんあるわけです。

確かにそういったメニューに沿って整備しても公園はできるわけですが、果たしてそういうふうに進めていいのかと多少疑問に思っていた時に、たまたま石材屋のご主人など市民の皆さんに会い、いろいろ議論していくうちに、せっかくお金使うのだったら何か良いものを造った方がいいのではないかという話になってきたわけです。“じゃあ、ちょっと手伝ってくだませんか”ということで、そこから官民協働の史跡公園づくりが始まりました。

“市民が利用するんだから市民の意見を聞きながらやっていくのが一番いいんじゃないか”と言ったら、これが大変でした。市民は何でも好き勝手なことを言ってきます。できないことばかり言ってきます。一つびっくりしたのは、“いや～、どうせやるんだったら、縄文時代というのはあなたの話だと精神文化が大切だと。あなたがいつも言っているように自然との共生だろう。だとしたら、それには森が必要だろう”と。“全面牧草畑のどこに森があるんですか？”と聞くと、“いや～、無いんだったら作ればいいんじゃないの”という話になって森づくりのプランができあがったのです。

正直に言いますと、これは迷惑な話でした。市民と一緒に森なんか作り出したら、これは収集がつかません。しかし、市民の皆さんも言い出したらもう後には引きませんから、作る方向で考えました。指導官庁の文化庁の調査官に申し出たら、案の定門前払いでした。“史跡の中で市民が勝手に木を植えて森を作るなんてことは前例が無い。それはちょっと考え直してくれ”と。私は両者の間に挟まって大変でした。しかし、私としては市民の視点にたった公園を造る覚悟で望んだわけですから引くわけにはいきません。“市民は作りたがっています”と。

その時に私は初めて気付いたことがあります。どの遺跡にも、その遺跡の特質があるんだということです。文化庁はそういった各遺跡の特質とは別なところで、史跡、整備の考え方を持っています。つまり、文化庁は全国どこの縄文遺跡でも通用するようなメニューを用意しているのです。遺構の復元や便益施設、そしてガイダンス施設など、いくつかメニューがすでに決められていて、そういう中でやってしまうと、どうしても日本全国どの史跡公園も同じ顔つきの公園になってしまうということです。

しかし、私はそれでは遺跡の個性は生かせないし、遺跡の特質にそって整備をやることにはならないと思いました。そこで私自身は、その時点で縄文文化の本質は精神文化にあるのだというふうな考え方に拘っていましたが、これから整備を始める北黄金貝塚についても、遺構や遺物からそうした「縄文人の息吹」を読み取ることができると考えておりましたので、そんな思いを文化庁の調査官にぶつけました。“何とか、縄文人が今のアイヌの人達につながるような文化を持っていて、自然と共生したことが来園した人に伝わるようにしたいんだ。だから森が欲しいのだ”と。最後は調査官も認めてくださいました。“まあ、ちょっと試験的だけれどもやってみましょうか”という話になったのです。そうした取り組みをボランティアが参加して息の長い活動として行なうことにも賛同してくださいました。

市民グループによるボランティア活動としての「縄文の森」づくりがスタートして今年で8年目になります。その間に一つ大事だと感じたのは、史跡整備に際しては「学ぶ」という視点を絶対に外してはいけないということでした。史跡整備の目的をいきなり観光資源にすることなどは絶対に駄目です。こんなことをしたら、何のために史跡公園を整備したのか分からなくなってきます。当然、観光資源としてそこから利益を得ようとなると、縄文時代とは関係の無い、縄文時代の本質とは違った所に大きなエネルギーを使わざるをえません。柵を廻して木戸銭を取るとか、そういうふうな話になってきます。でも、どうでしょうか。縄文の遺跡に柵を廻したら縄文時代のイメージなんか吹っ飛んでしまいます。そんな社会ではなかった筈です。北黄金貝塚では、そうした縄文時代の本質を外さないように、みんなで勉強しながら事業を進めていきました。

最初は、縄文時代の木をみんなで植えると言ったら、何でもかんでも持ってきていただきました。それでは駄目で、植物生態の専門家の指導を受けました。木が得意な人も集まってきてボランティアで参加する人が学べる環境ができていきました。花粉分析の値というのものもあるから、そういうデータを集めようじゃないかと。集めた上でみんなで検討してどんな木がふさわしいか考えようというので、13種類の木を市民とみんなで考え、植え方もみんなでルールを決めながら進めたのです。

大きな木を植えるのはやめ、小さな苗木から育てながら成長する姿を楽しもうということで、子供達も巻き込みました。小学校に話をして、どんぐりの種から苗木を育てる提案をしました。3年経ったら、みんなで教室から遺跡に持ってきて木を植えようと。そして、植えて終わりではないのです。それから皆で育てようということで8年がたちました。一番大きい木は白樺で、すごい成長力でもう10mにもなろうとしています。立派な林になっています。



今は、どこの遺跡でもボランティア制度が花盛りです。しかし作って終わりというボランティア団体も少なくありません。作った時は30人でスタートしたけれど、5年たったら半分になっちゃったと。飽きられてしまったと。マンネリ化してしまったということがたくさんあります。私たちのボランティア組織は、木を育てて縄文の森を作ろうという団体でした。彼らは夏の下草刈りとか森の管理も全部やってくれています。それどころか、最近は市民のみなさんをたくさん集めて縄文の勉強会や自然観察会などもやっています。

北黄金貝塚にはもう一つのボランティア組織があります。それは遺跡のガイドです。ガイドの皆さんには、あらかじめ北黄金貝塚の特質はこれだということをしっかり勉強してもらいました。勝手な自分の想像で説明するのはやめましょうと。どうしても自分のまちの遺跡でボランティア活動をやると、自然と誇りを持つのです。そうすると勢い余って大言壮語になりがちです。何か自分の偉さを縄文人に置き換えてしまうんですね。縄文人はいかに偉かったかということをととうとしゃべりだすんですよ。しゃべるのはたいてい物質文化なんです。“縄文人はこんなすごいナイフを作ったんだ、こんな立派な矢じりを作ったんだ”と自慢しだすんですね。自慢しちゃ駄目なんです。

そもそも縄文文化の本質はそんなことじゃないんです。ものづくりの技術を競った縄文人なんか一人もいないのです。彼らは、矢じりがイノシシに当たったときにイノシシが痛くないように、イノシシが安らかに逝かれるようにと願いを込めながら、多分矢じりを作っていたはずなんです。その思いが形に表れているのだから、そこを私達は勉強するのだとボランティアの皆さんには言っております。

ナイフもそうです。ただ切れやすいからあの形を作ったのではないのです。土器もそうです。考えてみてください。最初、縄文人は座りの良い平底の土器を作ったのです。それが、2000年経ったらどうですか。全然座りの悪い尖り底の土器にしているではないですか。それは技術的には後退です。でも、そこには縄文人にしか分からないようなすごい大変な苦悩もあるし、彼らの心の内なるものをあの土器に表しているはずなんです。そういったことを遺跡を訪れた人に伝えて欲しいと。とにかくあくまでも伝えるのは北黄金貝塚の縄文の本質、縄文人の真髓を伝えなければ駄目だと。それさえ伝えていればお客さんは必ず来るからとお願いしているのです。

現在、ボランティアのガイドは52人だと思いました。20人ほどで始めたのですが、やめる人はいません。何故かというをやめさせないのです。どんな事情があってもやめさせません。“私、隣の町に引っ越しますから”と言う人にも、“それでも名前は残しておいてください。一年に一回でも来てくれば良いですよ。それでも立派なボランティアだし、通信は必ずお送りして会の動きがちゃんと分かるようにしてあげますよ”と。“私はもう80歳を過ぎだからとても辛い”と言う人もいます。“坂を登るのが辛い。だからやめさせてくれ”と言うけれど一人もやめさせません。絶対減らないのです。増えるだけです。

これも私は良い手だなと密かに思っています。そういうことが大切なのです。やっぱり気持ちで引き留めておくということです。こうした組織はだんだん機械的になってシステムを作ってしまうのです。出番制度を設けたりすると、そのうちに争いが起きてしまうのです。出番制度なんか設けたら、“私ばかりで、あの人は全然出てない。出てこないのに学芸員はやさしく声掛ける”とかね。やっかみだとか、どろどろした人間関係になってしまうわけです。それは避けなければなりません。

もう一つ私が腐心したのは、誰を代表にするかです。ここでは会長、副会長、そういうヒエラルキーを作るのはもうやめました。最初からそういうシステムを作らないということです。その代わり「世話人制度」という形をとりました。何人かの世話人を決め代表だけを置きます。代表も含め世話人の仕事は、唯一会員を積極的に集めることができるという特権を持っています。それしか持っていません。何か物事を決めるときには会員の合議ですから、会の運営が硬直化しません。

そして、代表に誰を据えたかという、それが「社長」でした。とにかくこれでいこうというふうに最初から決めたのです。失礼ながら、一般的にどのまちでも文化財に一番遠い位置にいる人は誰か

という、それは経済人だと思います。しかし、ある意味経済人がまちを動かしているとなると、この経済人を文化財に引き込むことは、文化行政の裾野を広げるためにはどうしても欠かせないと考えたのです。

最初に声を掛けたのはクリーニング店の社長さんでした。案の定断られました。“私は文化財には縁がないし組織の代表なんて”というような発言です。それでも私は食い下がって、とにかく文化財の大切さを説きました。特に子供達、これは落としどころです。子供を出すとたいいグッとくるわけです。孫のことを出す。“お孫さんが、このまちに誇りを持てなくなったらどうするのですか”と。あまりしつこいものだから、“あんたがそれまで言うのだったらやってもいい。ただし、あと5年待ってくれ。あと5年経ったら息子に仕事を譲る。そしたら暇になるから”と言うのです。“いや社長、悪いけれども暇になったら頼まない。社長がいま社長だから、いま業界にちゃんとしたステータスを持っているし、私はそれを期待して社長に頼んでいる”と。最後の落としどころはそこででした。そこまで言って落ちない人はいませんでした。

そうやって私は経済界に食い込む糸口を見つけました。そして案の定、代表は彼が長年培ってきた人脈をフルに生かし会員集めに奔走してくれました。同時に、予期しなかったことも起こりました。それはお金が集まってきたことです。代表が言うには、“別に集めたくて集めたわけじゃない。でも業界の人間の所に回って声を掛けて歩いた。代表は声掛けろと言うから。そしたらみんな、やっぱり断ってくる。もちろん中には入ってくれる人もいたけど、でも断ってくるときにただでは断らない”と言うのです。“いや～、社長が言うから入りたいけど、喋るのも下手だし私にはガイドは向かない。しかし社長が頑張ってるんだから何がしかのお金だけは寄付する”と。あっという間に数十万円の寄付金が集まってきました。

暑い時にジュースでも飲みたいだろうと、業界からいろいろと差し入れが集まってきます。冷蔵庫もその集めたお金で買いました。ガイドさん用のジャンパーも帽子もみんなその寄付金で買っています。行政では一銭もボランティア団体にはにお金を出していません。さすがに市長も、それでは恥ずかしいと。交通費くらいは出せと言いました。でも交通費も出していません。お金をもらうことで何か役所から制約受けるのは嫌だと言うのです。“自由にやりたい、だから交通費は要らない”。この会の一番良い所は出番制度が無いところだということです。確かに、ボランティアが誰もいない日もあります。5人も10人もいる日もあります。好きなときに好きなだけ出てきてくれというのがこの会の制度なのです。そんな風にだらしくしておくとか案外組織は長続きします。出番制度なんか作ったら必ず争いが起きてきます。出番の日に休むと段々出辛くなってくるのです。そして断りにくくなるのです。ですから自由に参加する。人のことは詮索しない。出られるときにだけ出てくれという制度にしました。それが成功して、これを見本にして次から次に団体を立ち上げ、現在は5つの団体が組織されています。



私が次に取り組んだのが「文化研究所構想」です。実はそれにはある布石がありました。それは、伊達市を挙げて取り組んだイベント「縄文フェスタ」でした。これがきっかけとなって研究所の立ち

上げが可能になったのです。

北黄金貝塚の史跡整備が佳境にさしかかった時、この遺跡を市民が一丸となって全国に発信しようという気運が高まりました。幸い、青森市や富山市など著名な縄文遺跡をもつ都市が音頭をとって、縄文都市連絡協議会という全国組織が作られ持ち回りで「縄文サミット」を開催していました。伊達市もこれに参画しました。そして2000年には、伊達市でサミットが開催されることになったのです。

伊達市では、官民協働でこの事業にあたりました。350人の市民が参画しての実行委員会が作られ、実に10日間に26の縄文関連イベントを実施したのです。テーマはもちろん縄文ですが、実行委員が議論を重ね学習を重ねた結果、最終的に「縄文からアイヌへ」としました。自然と共生した縄文文化の大いなる精神性はアイヌ文化に受け継がれますが、この1万年の長きにわたって受け継がれた高い精神性こそ現代の私達が学ぶべき哲学であるとの認識から、これがテーマに採用されたのです。シンポジウムや縄文人展など多数の来場者を得てイベントは大成功でした。

フェスタを終えて一段落した時、実行委員の中から声があがりました。フェスタでは多くのお金を使いました。それを無駄にしないという意味もありましたけれども、それ以上に縄文への理解が深まったなという印象を私は得てある意味感動いたしました。“こんなにエネルギーを使ってイベントをやってこれで終わるのか。やっぱり、うちのまちにとって縄文文化は大事だ。そういうことが分かった。アイヌ文化は縄文文化を引き継いでいるということも分かった。でも、これでやめちゃったら皆また分からなくなっちゃうぞ”と。“だとしたら、この運動を継続しよう”と言うので、「縄文遺跡を生かしたまちづくり検討会議」という組織が立ち上がったのです。

組織は市長の諮問会議として作られました。やはり官民協働ですすめられました。1年間議論を重ねた結果、会議から市長に答申されてきたのは、実は「縄文文化研究所」という考え方でした。これにはさすがの私も驚きました。そこまで縄文が市民の中に根付くとは考えもしていなかったからです。教育委員会に検討が委ねられました。それにも1年間かけられました。

私は最後まで悩みました。縄文文化研究所でいいのかです。そして私は結果的に縄文を外しました。なぜ外したか。冒頭にお話ししたことが大きな理由です。伊達市の文化財行政にとってある意味ではシンボリックな存在が縄文です。ですから私は縄文文化研究所に直ぐにでも飛びつきたい心境ではありました。ましてや市民が理解してくれるのであればという思いでした。でも、ぐっところえて考えて考えたあげく「伊達市噴火湾文化研究所」に決めたのです。「財」の字を外したのです。

今、伊達市民に必要なのは「文化」という考え方です。文化の中に、実はアイヌ文化もあるし縄文文化も武家文化も近代の芸術文化があるのだということを理解してもらいたいと考えたからです。大きな考え方に立って文化をみる目を育てるためには「文化研究所」が良いと考えたのです。これを機会に文化全体を総合的にやる施設としても機能するような思いも強くしての選択でした。

今私達の研究所では、もちろん縄文文化にも取り組んでいますしアイヌ文化にも取り組んでいます。伊達で培われた文化を全部研究対象にして、その研究成果をいかに市民の中に浸透させていくかということでアイデアを出しています。そういう研究所なんです。

それからもう1つ、文化は何も歴史や民族文化だけではありません。今現在、私達が作り出している文化もあります。絵画や音楽です。ですから研究所では、クラシック音楽もやっておりますし、絵画芸術にも取り組んでいます。一昨年には研究所の中にアトリエも作りました。子供達の英才教育も

始めています。あの世界的なピアニストの岩崎淑先生を引っ張り出すことにも成功しました。ご友人の野田弘志画伯の誘いを受けて、ほとんどボランティアでやったださっています。世界に通用するような芸術家を目指して高い志に立ってやるのであればということで引き受けてくださいました。10年、20年先に伊達のまちづくりを担ってくれる人たちを育てようという、言わば「人づくり」がコンセプトです。

行政がやるということでは当然文句も出てきます。“なぜそんなことに税金を使うんだ。なぜ英才教育を役所がやらなきゃいけないんだ”という話になります。これはあくまでもまちづくりです。まちづくりの根幹は人づくりです。こういう社会情勢の中では、どうしても今日明日の生活が問題です。ですから人づくりというのは何かしら蔑ろにされがちです。しかし、10年、20年先の伊達のまちづくりを考えたら、今子供達を育て明日の伊達のまちづくりを担う人材を作るということも大事なことです。

私達がまちづくりをしようとする、現在はそれを担う人材がいまないので、どうしても他から人を呼んでみます。どこのまちでもそうだと思います。でも、そうではなくて、これから地に足を着けたまちづくりを行なうには、自分達で人材を育てていくことが大切なのです。だとしたら、徹底的にやれることをやるということです。市民全体のことを考えたら、誰もが参加できるお絵かき教室とか音楽教室をやるのが一番です。しかしそれでは人材は育ちません。従来の考え方を改めて新たな視点で人材を育てていくということをしなければいけないと思います。

実は「縄文フェスタ」もそうでしたが、こうした高い理念にたって文化事業をやる必要があります。もちろん、娯楽や教養といった市民個々人の教養を深めたり余暇を楽しむための文化も必要です。しかし、ある意味文化的に豊かになったこの時代に、そのことに行政が深く関わる必要は無いように思います。むしろ、明日のまちづくりを担うための人材育成にこそ力が注がれるべきでしょう。縄文フェスタはそうした新たな視点が必要なんだということを理解していただくために行なったイベントでもあったのです。こうした取り組みがあったからこそ、この文化研究所の構想も生まれてきたのだということと言うまでもありません。

従来は文化財行政というのはなかなか市民が入ってこれませんでした。博物館や美術館にはたいてい友の会があります。あれが典型的な官民協働の形かもしれませんが、しかし私に言わせれば決して十分なシステムではありません。博物館や歴史が好き、美術が好きという人達が集まってきて友の会がつくられます。しかし、それでは裾野は広がっていきません。ボランティアもそうですが、必要なのは文化に関心の無い大多数の人をどうやって取り込み高いレベルに育てるかということです。

博物館や美術館の運営も、市民の高いレベルの理解をどうやって勝ち取るかが問題なのです。実は文化財行政というのは自治体行政の中では最もボランティアの育ちにくい分野だと思います。私のまちには知的障害者の施設や社会福祉施設が沢山あります。30年位前からそうした弱者のためのボランティア団体がたくさん作られてきました。数だけでなく質の高い福祉ボランティアはどんどん育っているのに、文化財ボランティアは裾野が広がりません。どうしても文化人と言われている人しか集まってくれません。でもそれでは駄目で、もっと裾野が広がらなければならないのです。

そうした視点から、先ほどの社長さんの例にありますように、何とか裾野を広げ、なおかつレベル

を上げていこうと努力をしてきました。“あなたにもできる。文化は伊達のまちのステータスです”ということをキャッチフレーズにしながらどんどん広げていって、ようやく 200 人以上の市民が参画してくれたのです。2003 年に、日本人類学会を大学のない伊達市で開催できたのも、そうした高いレベルでまちづくりが必要だという視点をボランティアの皆さんが受け入れたからです。



伊達市にはもちろん大学はありません。当然学生もいません。そういう中で全国学会を開きました。第 57 回日本人類学会大会です。日本で最も伝統のある古い学会の一つです。年次大会は、未だかつて東京、大阪といった主要都市でしか開いたことがありませんし、会場も大学以外では開いたことがありません。それを伊達市に誘致したのです。もちろん市役所だけでやることはできません。市民のサポートがなければ到底開催は無理でした。

結果は大成功に終わりました。当時 150 人の市民ボランティアが参画してくれました。受付から会場の整理など普段は学生や先生方がやる役割を全部市民が分担してやりました。その代わり交換条件がありました。会場使用料を全部無料にする代わりに、研究発表やシンポジウムなど全てのセッションを市民公開にさせていただいたことです。私はそれをお願いするに際して、“別に市民向けに質を落としてもらう気はありません。難しいのは重々知っています”と。しかし、シンポジウム会場でびっくりしたのは、コーディネーターの先生方が、事前に各シンポジストと打ち合わせて、“今回は伊達市で、市民の方がたくさん入ります。私達にとってはものすごく良い機会です。私達のやっている研究をなんとか少しでも市民に理解してもらうような努力をみなさんしてください”という申し合わせをしてくれていたことです。もちろん質を落とすということではありません。例えば英語の表現や専門的な表現をなるべく控えるとかということでした。

私はもう涙なくしてはそれは聞けない話でした。非常にありがたかったです。市民のみなさん方もたくさん来ました。知的空間に身を置くことの心地よい緊張感というのでしょうか。普段伊達にいたらそんな機会はありません。横手市のみなさんや秋田市の皆さん方はそういう機会は沢山あると思います。大学ももちろんすぐそばにあるわけですから。知的空間に身を置くことは難しくありません。でも、伊達市 3 万 5 千人のまちではこういった知的空間に身を置くことはそうあることではないのです。



そうした一連の活動の中で、私達は伊達市噴火湾文化研究所という組織を立ち上げました。一昨年の 4 月のことです。ここには正職員が 9 人います。今、伊達市も財政難のために職員もずいぶん削減して、私が入った時は 400 人いましたけど、現在は 340 人まで減りました。そうした中で噴火湾文化研究所には 9 人のスタッフを置いております。これは決して少ない数ではありません。

考古学と歴史の学芸員が 2 名おります。私は学芸員の資格を持っていませんが、一応専門職ということです。ですから 6 名は事務職です。私はこれが大切だと思っています。学芸員は必要ですが、

一般事務員のスタッフも必要なんです。そうした人達とはとにかく3年とか5年おきに異動があります。つまり、だいたいどの課にいる職員も10年20年の間には一度はうちの課で仕事をするようになるわけで、役所の中で文化がいかに重要な仕事かということを理解してもらうためには、それが大切なのです。配属になった職員は徹底的に洗脳します。

研究を立ち上げてさまざまな研究に取り組んだのはレジュメに書いておりました。文化をまちづくりの資源として考え、研究の成果を何とかアイデアを凝らしながらのまちづくりに活かしていくのです。そのために研究所はあります。これからのまちづくりの基盤は間違いなく文化にあると思います。これまで先人が培ってきた文化を蔑ろにしては意味のあるまちづくりはできないと思います。見通しのないままに、何かしら突飛な観光資源を作りあげてしまったりしても必ず破綻をきたします。しかし文化は裏切りません。文化は必ず私達に見返りをくれます。文化を大事にすれば、いつか必ず何かしら光が当たる筈です。そういうことを考えて、私達は文化を「まちづくり資源」と呼んでいます。

まちづくり資源の代表は伊達市では何と言っても文化財です。去年一年間はこの文化財をまちづくりに活用するためにさまざまな提案をしてきました。そうなんです。文化研究所の役割の一つは、さまざまな文化を調査・整理・研究し、その成果を積極的にまちづくりのために活用を図ることです。活用策は、その内容によっていろいろな機関や団体に提案していきます。研究所が直接事業を行なうことは基本的にはありません。言うなれば研究所は文化の「シンクタンク」なのです。

例えば、史跡の活用策も考えました。国史跡の境内を活用して「門前市」を開く計画を提案しました。これは地域の商工会が提案を採用してくれました。それから「街角名作ギャラリー」。これは空き店舗対策の一つとして商店街、商工会に提案いたしました。空き店舗を商工会議所に開放してもらって、そこで研究所が所蔵する絵画を展示したのです。今後は、複数の商店街が協力して同時にさまざまなギャラリーを開設することも計画しています。民俗資料、縄文土器なども大いに活用を図るべきと考えています。空洞化した商店街に新たな人の流れを作ろうというコンセプトですが、その時にも大切なキーワードは「学び」です。遊び半分では駄目です。展示会を開いても、珍しさで人が来ると思ったら駄目です。必ず「学習」という要素を入れるということです。そして、一人でも二人でも来たお客さんには何かそこで、ちゃんとした知識を得て帰ってもらうというシステムの中でやっていくということです。

「アカデミック・コンベンション・ビューロー」も私たちの提案です。これは観光協会の方に提案しました。それから、「心の伊達市民」という制度。皆さん方に失礼ながらチラシをお渡しましたが、こんなにうまくいったアイデアはありません。去年の4月からスタートしたのですけれど、もうすでに1000人の会員が心の市民となりました。全国から、遠くは鹿児島から来ています。一番多いのは東京ですけれども、“心の伊達市民になっていただだけませんか”ということで住民登録していただいています。住民になった以上は税金も貰っています。“一口千円で、心の市民税を払ってください。住民票発行します。ちゃんと専用の広報も発行しお送りします”と。

最高納税者は40口で4万円送ってきている人がいます。そして、納税された方には、納税額に見合っただけの物産をお送りしているのです。そのために、商工会議所や農協、漁港の協力を得ています。中には、寄付だと思って納税しているのでお返しは要らないという人もおります。私達としては、

伊達の物産のPRだと思ってお送りしています。“伊達にはこんな美味しい長イモがあるよ。こんな魚介類も美味しいよ”ということで、宣伝したいがために強制的に送っています。

この制度も徐々に定着しようとしています。市長は、将来的には会員を一万人にしたいという夢を持っていますが、たぶん私はいけるのではないかなと思っています。ここまで言ったら、会場の皆さん中の3人や4人は、きっと心の伊達市民になってくれるのではないかと期待を持って話していますので一つお願いします。

実は、研究所という名前は子供達のために付けたと言ってもいいかも知れません。“私の住むまちには研究所があるよ”という、子供達にとっては非常に誇りになるのではないかと思います。私のまちはこうやって文化を大事にしてるという思いを醸成させる効果を考えたからです。もちろん、こうした施設の必要性や在り方については色々な意見が出ました。名前も「文化センター」にした方がいいのではないかという意見が多かったのです。しかし私はあえて研究所にこだわりました。それは子どもたちのためにです。

ところで、研究所が今一番力を入れているのは、「伊達噴火湾アートビレッジ」という芸術部門の創設です。私は、文化の根源はアリストテレスではありませんけれど芸術にあるのだと思っています。私達人間が何者であるのか、人間の存在をきちっと提示できるのはやはり芸術なのです。音楽であったり、美術であったり、彫刻であったり、建築であったり、詩であったり、文学であったり、そういったものが私達人間の本質をちゃんと主張できるものなのです。学校教育の中で、子供達に一生懸命詩を書かせていますけど、何かそんなものより数学をやった方が良くとお思いの方が多いのではないかと思います。しかしそうではないと思います。計算も大切だけれど子供達が自分の本質をどうやって提示できるかということです。絵もそうです。何を考えているのか人間性を出せるのは芸術しかないのですよ。

人間は唯一自殺する動物です。犬は自殺しません。猫が自殺したの私は見たこともありません。あの人間に近いチンパンジーだって自殺はしません。首つりをしたゴリラを見たことがありますか。首がいくら長いからってキリンだって自殺はしません。唯一人間だけが自殺する動物なのです。それは、精神文化を手に入れた代償なのです。7万年前に新人として進化を遂げた人間が精神文化を手に入れた時に、人間は己の本質が死すべき人間であり、いつかは死ぬということを知ってしまったのです。犬は死ぬということを知りません。キリンも気付いていません。熊も気付いていません。唯一死ぬということを知っているのは人間だけなのです。だからこそ人間は芸術を通して死への恐怖から逃れようとしてきたのです。ですから、「生きる」ということも人間の本質なのです。人間は芸術を通して死を表現するだけではなく、死を乗り越えるために生き生きとした「生」もまた芸術として表現してきたのです。あのギリシャ芸術がそうです。あの生き生きとした女性や男性の彫刻像にそれが表わされています。

ギリシャ彫刻は、特定の女性をモデルに描いたものではないと言われています。人間の生きるという力を思いっきり描いたのがギリシャ彫刻だと言われています。それは死なないために人間が考え出した知恵なのです。死なないためには、自分が生きているんだ、存在していることに意味があるんだという思いを、それを何らかの形で提示するということです。主張するということです。これを奪われたら、みんな自殺してしまうということです。

そのように考えていくと、音楽や文学や演劇の意味もちゃんと分かるはずです。ある意味では図書館が充実していないのは、そのまちの大きな損失です。芸術的な心性は良質な本によって充実されます。生きることの本質的な意味を本を読みながら確認することができます。古今東西の賢者の意見に耳を傾けることができるからです。そうした大切なものにお金を使わない行政は私は駄目だと思います。でも、あまり偉そうなことは言えません。私のまちもそう図書館が充実しているわけではありませんので。

こうした大きな理念のもとに芸術分野の「伊達噴火湾アートビレッジ」という事業を始めています。全道から才能のある子供達を募り、わが国を代表する写実画家の野田弘志画伯が指導にあたっています。今後は、引き続き音楽部門や文学部門のマスタークラスも開設し、総合的な芸術振興を展開していきたいと考えています。そして、こうした取り組み、市民ぐるみの取り組みが、伊達市のステータスを高めていくひとつの方策だと思います。まさにそうした実践が真の「まちづくり」ではないでしょうか。



最後になりましたが、遺跡の話で締めたいと思います。先ほど、横手の大鳥井柵遺跡の発表を聞きましたが、これは将来的には史跡にしてそれを整備して市民の皆さん方にその意義を伝えたいということでしたけど、とにかく大いに進めるべきです。遺跡は市民のものです。市民にとって大事なのですから。まず私達学芸員なり調査員なりがしっかり調査・研究をしてその成果を確実に整備に反映させなければなりません。そして、整備を通して市民が遺跡の重要性を学べるのが望ましいのです。

史跡整備の目的をあやふやなものにしては駄目です。史跡整備は学者のためにやるわけではありません。どうしても私達学者というのは自分のためにやっけてしまいがちです。遺跡を研究することに意義を見出してしまいがちです。もちろん研究してもいいのです。研究しなければ駄目です。ただし、その研究成果を市民に的確に情報発信することが大切なんです。研究を通して遺跡の本質に迫り、テーマパークでなく「質の高い情報」の提供を行なう。これしかない、10年間自分で北黄金貝塚という縄文遺跡の整備をやって気付きました。遺跡整備の中で何か奇をてらった方法で客を呼ぼうなんて考えると、その時点でその史跡は駄目になります。史跡に人を呼ぶ、人が来てくれる史跡にするということは、唯一質の高い情報を出し続けるということだと思います。これしかありません。これは断言できます。

史跡整備はある一時期、お金が潤沢な時にブームになりました。何かしら遺跡の本質とはかけ離れたところで整備が行なわれ、テーマパークのような公園にした時代があります。どこの遺跡とは言いませんけれども、しかしそれはいずれ破綻をします。人はそういうものを見てもそこから本質が伝わらないと、もう二度とは足を運びません。どの遺跡にも特質があります。縄文の遺跡なら縄文遺跡、秋田の横手市のどの遺跡にも、そこにしかない特質があるはずなんです。

情報はそこから引き出さなければ駄目です。しかも質の高い情報でなければ駄目です。何かしらちょっと考古学の概説書を読んで、どこにでもあるような情報を出しては駄目なのです。その遺跡の情報は、その遺跡を研究する学芸員なり調査員しか分かりえないことです。ですからその人達に市

民の皆さんは研究させてください。尻を叩いてください。“何だ、まだ分かんないのかそんなことも。もっとちゃんと教えてくれよ”ということを市民がいつも要求しなければ駄目です。

何か生意気なことを、随分言ったようですが、文化行政の在り方についての私の率直な感想です。10年間史跡整備をやってみて確信をもって言えるのは、ボランティアさんを集める時にも、遺跡に来観者を集めようとするときにも、本質を外したら絶対に駄目だということです。本質は外さずに、史跡整備をやる。遺跡は誰のためにあるのかということを考えるならば、それはそんなに難しいことではないということです。このことを力説して講演を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。